様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００４８４

研究課題名（和文）19世紀ロシアにおける「全一性」概念の形成に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on the Formation of the Concept of "All-unity" in 19th-Century Russia

研究代表者
坂庭　淳史（Sakaniwa, Atsushi）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：８０３２９０４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀ロシアの思想・文学において形成された「全一性」概念を対象とし、哲学、宗教、歴史などの観点からその組成を総合的に分析することを目的とした。本研究の成果を概括するならば、「全一性」概念の形成過程において　①「文学」と「思想」の具体的な接点を抽出し、このテーマを切り口に、ロシア文学史、思想史、文化史に新たな読み解きの可能性を提示したこと　②カトリック思想の影響など、「全一性」概念の中にある西欧思想の要素を明らかにしつつも、その独自性を否定するのではなく、ロシアで育まれた世界観と西欧の世界観とのハイブリッドという高次の思想としてこの概念を再評価したこと　の2点となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ロシアにおいて「全一性」概念は、その独自性、あるいは正教の思想との類縁性が強調され、それはときに過剰とさえ感じられることがある。本研究ではこの概念の形成過程において、カトリック、あるいはカトリックとゆかりのある人物たちが大きな意味を持つことを指摘した。これは「ロシアのカトリック」に関する研究の活性化を促し、昨今顕在化している「ロシアと欧米」の対立の根源を探るヒントにもなるだろう。また、本研究ではイヴァン・ガガーリンのロシア思想史・宗教史、文化史における重要性を確認することができた。この人物に関する研究を通して、日本におけるロシア思想・文化研究にもあらたな視点を提供しえたと考えている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to comprehensively analyze the composition of the concept of "All-unity" from the perspectives of philosophy, religion, and history. This concept was formed in Russian thought and literature throughout the 19th century. To summarize the results of this study, the following points were confirmed in the formation process of the "All-unity" concept: (1) the specific points of contact between "literature" and "thought" were extracted, and using this theme as a starting point, new reading possibilities in Russian literature, thought, and cultural history were presented; (2) While identifying elements of Western thought in the concept of "All-unity," such as the influence of Catholic thought, this study does not deny its uniqueness, but rather reevaluates the concept as a hybrid of Russian and Western worldviews.

研究分野：19世紀ロシア文学、思想

キーワード：ロシア哲学　全一性　チュッチェフ　ガガーリン　チャアダーエフ　ソロヴィヨフ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、ロシア文学・思想において 19 世紀全体を通して形成された「全一性」概念を研究対象とし、哲学、宗教、歴史などの観点からその組成を総合的に分析している。

「全一性」とはそもそも古典古代にその淵源を持つ概念だが、近代ロシアにおいては 1890 年代に思想家ソロヴィヨフ(1853-1900)によって初めて体系的に提示された。「すべての存在の多の中における有機的統一」や「地上の生における人間の理想としての神的完全性」という考えを根本に置くこの概念は、ロシア文化の基層にある正教思想とも親和性が高く、ロシア思想史内の必須事項として認識されており、現代においてもその重要性は薄れていない。

しかし本研究の学術的背景の特徴としてまず記しておきたいのは、「全一性」概念が主にソロヴィヨフ「以降」の思想、文学との関連で語られてきたことである。ソロヴィヨフ研究および「全一性」概念の研究においては、彼が西欧思想の影響を脱したロシア初の独創的思想家とされてきたこととも相まって、「全一性」概念の独自性や以降のロシア思想の実質的な礎としての側面がクローズアップされる傾向がある。ソロヴィヨフの影響を受けた、エヴゲーニー・トルベツコーイやブルガーコフといった次世代の思想家や文学者たちによるその展開が詳細に考察される一方で、その形成過程や思想的ルーツの重要性については、スラヴ派の思想家ホミャコーフ(1804-1860)が正教に基づくロシアの民族的特質として唱えた「ソボールノスチ（キリストと結ばれた人々の間の自由な連合）」概念との類縁性を除けば、十分には注目されてこなかった。ようやく 2010 年代に入ったころから、ソロヴィヨフ「以前」の思想に注目する研究者が少しずつ現れてきた。ソロヴィヨフの「全一性」概念の思想的ルーツとして、研究者カーントルやエプシテインは、1830 年代においてロシアの後進性を厳しく批判しつつカトリック・西欧への合流を説いたチャアダーエフ(1794-1856)に注目している。このように近年では「全一性」概念をなかば 19 世紀ロシア思想の集大成として捉える動きがわずかながらも生まれてきており、当時の知識人たちの近代ロシアにふさわしい、新たな「知」を模索するプロセスが考察されている。

ロシア思想史研究において重要な存在であるチャアダーエフとソロヴィヨフだが、その手段と方法は異なるが、彼らはともに正教（ロシア）とカトリック（西欧）の統合を目指して――あるいは正教由来のロシア文化を、ヨーロッパ普遍の文化へと転換しようとしていた。19 世紀ロシア思想史において、こうした考え方を持っていた者は彼ら以外にはあまり見当たらない。西欧文化・哲学、カトリックにも造詣の深かった二人の間での思想の展開や継承を考えると、「『全一性』概念とは、果たして『ロシア独自の精神』と言えるのか？　西欧哲学やカトリック思想からの影響は含まれてはいないのか？」という疑問が生まれてきた。こうした問いを背景として本研究は開始された。

２．研究の目的

本研究は 1830 年代から 1890 年代までを主な研究対象期間とし、その間の「全一性」概念の組成や形成の過程に直接的、間接的に影響を与えたロシア国内外の論考や著作、書簡について、哲学、宗教、歴史などの観点から総合的に分析することを目的とした。「全一性」概念がロシア文学史、思想史、文化史において果たした役割を明らかにすることもまた目的であった。さらにより詳細かつ具体的に、以下の 2 点を挙げておく。

①近代ロシア思想の礎とされる「全一性」概念に内在する、あるいは間接的に取り込まれて

いる西欧の思想を抽出する。そして「全一性」概念の中にある西欧思想の要素に注目することによってその独自性を否定するのではなく、ロシアで育まれた世界観と西欧の世界観とのハイブリッドという高次の思想としてこの概念を再評価すること。
②「文学」と「思想」という二つの研究領域を横断して、ロシア文化の特質を解明すること。二つの領域を合わせて論じながら、(ソロヴィヨフによる体系化を終着点とする)「全一性」概念の形成というテーマで一つの流れを示すことで、ロシア文学史、思想史、文化史に新たな読み解きの可能性を提示すること。
　さらに本研究では①、②を通して、「全一性」概念についてこれまで示されてこなかったより深い魅力と意義について考察した。

３．研究の方法

　本研究では、具体的な考察のポイントとして以下の 4 点があった。それぞれについて明らかにしようとすることを示す。

①「全一性」概念のルーツとしての西欧哲学、カトリック保守思想のロシアにおける受容
チャアダーエフを考察の中心におき、19 世紀前半にロシアに様々なルートで取り込まれた西欧の思想とそのロシアによる受容の諸相を考察した。チャアダーエフはその思想形成においてプラトニズムやドイツ観念論のシェリングの哲学などとともに、カトリックの保守思想にも引き寄せられていた。とりわけ 19 世紀初めにサヴォイア王国の役人としてロシアに滞在したジョゼフ・ド・メーストル（1763-1852）からの影響が大きい。正教国ロシアにとってみればカトリックはいわば他者の宗教だが、それでもチャアダーエフはカトリックの「個と全体」に関するシステマチックな考え方を高く評価していた。本研究ではまず、メーストルに加えて、これまで十分に分析されてきていない、ブレーズ・パスカル（1623-1662）、ジャンセニズムの思想のロシアにおける受容を考察している。考察の過程において、ロシア人で初めてカトリック会士となったイヴァン・ガガーリン（1814-1882）の重要性が明らかになったことも付記しておく。
②「全一性」概念形成にいたる文学上での展開（チュッチェフ）　チャアダーエフとソロヴィヨフの時代をつなぐ文学者として、チュッチェフ(1803-1873)に注目した。外交官として西欧に長く暮らした詩人チュッチェフは、チャアダーエフの親友であり論争相手でもあった。ソロヴィヨフは、自身の思想に引き寄せながら論文「チュッチェフの詩」(1895)でその詩的世界観を詳細に論じている（本来合わせて考察すべきであったドストエフスキー（の小説）については、研究の展開の中で取り上げることができなかった)。本研究では、抒情詩における「私／個」の表現とロシア思想との共鳴についても提示している。
③19 世紀中頃のロシア思想および正教の伝統との接続　前述したように「全一性」概念はスラヴ派の「ソボールノスチ)」や正教の思想との類縁性はこれまでにも論じられてきているが、先行研究を踏まえ、西欧思想との連関にも依拠してその差異を通して互いの概念の特徴を明らかにした（あわせて考察を予定していた、チェルヌイシェフスキーの思想については、研究展開上の都合で取り上げることができなかった)。
　これらのいずれの点の分析においても「理想・理念と現実」、「生と死」、「個と全体／個人と社会」、「ロシアと西欧」などを共通する問題意識として導入するとともに、これまでに坂庭が主な研究対象としてきたチュッチェフの著作（およびその他の詩人たちの「哲学詩」）に関する研究成果も考察に盛り込み、両研究の相乗効果の創出を狙った。なお、導き出された結果については国内外での学会発表（2019 年 6 月にクラクフ（ポーランド）で開催され

たソロヴィヨフに関する国際学会および、2021 年に開催された「第 9 回国際中欧・東欧研究協議会世界大会 」[2020 年にモントリオール（カナダ）での開催が計画されていたが、コロナ禍のため 2021 年にオンライン開催となった］や論文投稿を通して評価を問い、最終的には「全一性」概念を通したロシア文学史、文化史の新たな読み解きの提示を試みている。

４．研究成果

研究成果については、大きく 2 点に分けて説明する。前項「３．研究の方法」で挙げた 3 点のうち、③は成果としては、①、②の中に含まれているためである。

①「全一性」概念のルーツとしての西欧哲学、カトリック保守思想のロシアにおける受容

『ロシア文化研究』28 号（2021 年 3 月刊行）に掲載された論文「『考える葦』をめぐって――チュッチェフとパスカル」では、「全一性」概念の形成において大きな役割を果たしているフョードル・チュッチェフの詩と政治論文に注目した。中でも、チュッチェフの著作における 17 世紀フランスの思想家ブレーズ・パスカルの著作『パンセ』の思想との呼応を考察した。カトリック教会に論争を巻き起こしたジャンセニズムの信仰・思想でも知られるパスカルの人間観と、チュッチェフの人間観はその多くを共有している。しかし護教論である『パンセ』では克服されている「生に対する恐怖」の感覚を、チュッチェフは最後まで抱き続けた。彼は、自身の信仰に確信が持てなかったのだ。この論文の中ではさらに、パスカルの影響を受けた 19-20 世紀のロシアの思想家たちを列挙しつつ、この「恐怖」の感覚の有無にもとづいて大きく二つの流れを抽出している。この論文は、近代ロシアの思想と文学におけるカトリックとの関係の根本的な部分を分析したものである。

論文「19 世紀ロシアのカトリック」（『ロシア文化研究』30 号、2023 年 3 月）では、カトリックに改宗し、ロシア人最初のイエズス会士となったイヴァン・ガガーリンを主な考察対象としている。本研究を開始した当初は、この人物の存在については認識していたものの、その重要さは十分には理解できていなかった。本研究に置いて資料収集を進める中で、ガガーリンを大きくクローズアップしているポーランドの研究者バリツキや、ロシアの研究者ツィムバエヴァの近年の基本的な研究に出会い、それらにもとづいて、ガガーリンの活動や存在の意義を日本の研究者に向けて紹介できたこともまた本研究の成果の一つと考えている。名門貴族の子弟であるガガーリンは、市民権や財産を失ってさえもカトリックに改宗し、さらにイエズス会士となった。そして、東西教会の再統合を目指しつつ、キリスト教のあり方をめぐって、国外・ロシア人カトリックという立場から主にスラヴ派思想家たちと論戦を繰り広げた。正教に対する彼の言説はロシア国内の思想に大きな影響を及ぼした。この論文では、中でも「全一性」概念のルーツでもあるスラヴ派ホミャコーフの「ソボールノスチ」概念が、ガガーリンの言論への反応の中で明示されたことを指摘している。

②「全一性」概念形成にいたる文学上での展開（チュッチェフ、プーシキン）

2019 年 6 月 2 日から 5 日にクラクフ（ポーランド）で開催された国際学会「ウラジーミル・ソロヴィヨフ：愛の形而上学」に参加し、「ソロヴィヨフとチュッチェフ：愛の概念のもう一つの一致」と題して研究発表を行った。考察対象は、思想家ウラジーミル・ソロヴィヨフ（1853-1900）の論文「チュッチェフの詩」（1895）であった。ロシアにおける「全一性」思想を完成したソロヴィヨフが、同時代のロシアでは半ば忘れ去られていた詩人フョードル・チュッチェフ（1803-1873）の詩に注目し、その「人間」、「悪」、「キリスト」といったテーマの展開について論述しながら、「キリスト教帝国ロシア」という考えをチュッチェフと自身の共通点として提示している。この発表では、二人の思想の根底に潜む「東西教会

再合同」の思想を指摘している。また、ソロヴィヨフの論文の発表当時はチュッチェフに関する情報がかなり限定されていたことを検証しながら、彼が論じていないチュッチェフの恋愛詩にこそ本質的な共通点があることを主張した。この発表は高い評価を受け、2023 年刊行予定の論集(Vladimir Soloviev: The Metaphysics of Love, eds. Teresa Obolevitch & Randall A. Poole, Eugene, OR: Pickwick Publications 2021.)に収録される。また、この成果を踏まえ、さらにソロヴィヨフの論文の思想形成や構成について、2020 年 3 月 5-6 日に九州大学で開催された「プラトンとロシア」研究会で発表した。

貝澤哉、杉浦秀一、下里俊行『〈超越性〉と〈生〉との接続』（水声社、2022 年 3 月刊行）に収録された論文：坂庭淳史「プーシキンから見たチャアダーエフ：『エヴゲーニー・オネーギン』における感情の交錯」では、19 世紀ロシアにおける「全一性」概念の形成の始祖とも言える思想家チャアダーエフと、彼の薫陶をうけ、その後に国民作家となるプーシキンの関係の変化に目を向けた。現実に対して二人の態度が次第に乖離していく様子が、プーシキンの代表作『エヴゲーニー・オネーギン』の中に反映されていることを明らかにした。これはチャアダーエフが推進したカトリック保守思想に基づく世界観と、現実をリアルにとらえる国民作家プーシキン――ロシア文化の二つの方向性を示す作業であった。なお、この論文は 2021 年度の国際学会発表（ロシア語発表）：坂庭淳史「プーシキンとチャアダーエフ：なぜ詩人はオネーギンを「第二のチャアダーエフ」と呼んだのか？」（第 10 回国際中欧・東欧研究協議世界バーチャル大会、2021 年 8 月 4 日）の内容に基づいている。

最後に研究全体を概観し、今後の研究の展望についても記しておく。本研究では、19 世紀ロシアの「全一性」概念の形成過程において①「文学と思想」の接点（プーシキンとチャアダーエフ、チュッチェフとソロヴィヨフ）を明快に示したこと　②カトリック思想の影響を具体的に提示したこと　の 2 点が主な成果となる。

今後の発展的研究の課題となるのは、カトリックとロシア思想（とりわけ、「全一性」概念を体系的に示したソロヴィヨフ、およびスラヴ派思想家サマーリン）の関係の検討である。また、イヴァン・ガガーリン、および当初の研究計画では言及する予定であったカトリック保守思想家ド・メーストルも含めて、「ロシアにおけるカトリック」「東西教会の再合同」というテーマについては以降も考察を続けていく予定である。

研究の実践的側面では、本研究での活動を通じて、これまでにも交流のあったサンクトペテルブルク大学（ロシア）の研究者たちとより強固な研究協力体制を築けたことも記しておきたい。中でもイーゴリ・エヴラームピエフ教授は、本研究のチャアダーエフ、チュッチェフ、ソロヴィヨフ研究に関して、有益な助言を与えてくれた。エヴラームピエフ教授の著書『ロシア哲学史』の翻訳書（共訳）を刊行することができたが、これは日本における「全一性」概念研究のみならず、ロシア思想研究全体に大きく寄与するものであると自負している。また、2023 年 3 月にはポーランドより、20 世紀ロシアの思想家フランクの代表的研究者テレーザ・オボレーヴィチ氏（ヨハネパウロ 2 世大学：クラクフ）を招聘して講演会、研究発表会を開催した。8 日間の短い滞在の間に、フランクの「全一性」概念と 19 世紀ロシア思想の接続について確認し合い、また今後の共同研究の可能性に関して意見交換を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 坂庭淳史	４．巻 30
２．論文標題 19世紀ロシアのカトリック：イヴァン・ガガーリンのチュッチェフ、スラヴ派との対話	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ロシア文化研究	６．最初と最後の頁 1-18頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂庭淳史	４．巻 28
２．論文標題 「考える葦」をめぐって ――チュッチェフとパスカル――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ロシア文化研究	６．最初と最後の頁 19-39頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 坂庭淳史
２．発表標題 イエズス会士イヴァン・ガガーリンとロシア思想
３．学会等名 「プラトンとロシア」研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 坂庭淳史
２．発表標題 プーシキンとチャアダーエフ：なぜ詩人はオネーギンを「第二のチャアダーエフ」と呼んだのか？
３．学会等名 第10回国際中欧・東欧研究協議世界バーチャル大会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ａｃｕｓｉ Ｓａｋａｎｉｖａ
２．発表標題 Ｓｏｌｏｖｙｅｖ ｉ Ｔｙｔｃｈｅｖ:ｅｓｔｅ ｏｄｎｏ ｓｏｐｖａｄｅｎｉｅ ｐｏｎｙａｔｉｙａ ｌｙｕｂｖｉ
３．学会等名 Vladimir Soloviev: the metaphisics of love（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂庭淳史
２．発表標題 ソロヴィヨフの論文「チュッチェフの詩」をめぐって
３．学会等名 「プラトンとロシア」 研究会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

１．著者名 Teresa Obolevitch	４．発行年 2023年
２．出版社 Pickwick Publications	５．総ページ数 -
３．書名 Vladimir Soloviev: The Metaphysics of Love	

１．著者名 イーゴリ・エヴラームピエフ、下里俊行、坂庭淳史ほか訳	４．発行年 2022年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 637
３．書名 ロシア哲学史	

１．著者名 貝澤哉	４．発行年 2022年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 335
３．書名 〈超越性〉と〈生〉との接続	

１．著者名 井桁貞義、伊東一郎	４．発行年 2021年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 407
３．書名 ドストエフスキーとの対話	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関